

週日の説教

金 大烈 神父 2011年6月21日(火)

《狭い門から入りなさい ―与えられた十字架を感謝しながら負いましょう―》

あるお母さんに6人の息子がいました。子どもたちはそれぞれ成長し、末の息子も結婚しました。そのうち、お母さんは大きな病気にかかり、身の回りのことにも困るようになりました。しかし、息子夫婦たちのうち誰もお母さんの面倒を見ようとはしませんでした。その中で、末の息子の妻だけがカトリック信者で、そのことを気にしていました。「自分がお義母さんの面倒を見るべきではないか」と心の中で葛藤していました。けれども、その末の息子の妻も、他の義兄や義姉に対する批判的な思いがたくさんありました。“なぜ一番年下の私たちが心配しなくてはいけないのか” “なぜ私たちが罪の意識を感じなければならないのか” そう思って、複雑な気持ちでした。同時に、自分がお義母さんを受け入れて面倒を見るべきではないか、という気持ちも強く持っていました。しかし結局彼女は負けました。“私にはまだ世話をしなければならない幼い子どもたちがいるし、毎日教会に行き奉仕の活動も一生懸命にしている。だから、私がしなくても神様は赦してくださるだろう。” そのような妻の考えを聞いた夫も何も言えなかったそうです。しかし、彼女の心は、平安な気持ちではなく、不自由なつらい気持ちでいっぱいでした。

これは実際にあった話です。今日の福音(マタイ 7:6、12-14)を読んで、その話を思い出しました。結局そのお母さんは、誰にも面倒を見てもらわずに、苦痛の中で死にました。そして、この話はお母さんが死んだ後、末息子の妻が告白したものです。

さあ、私たちはどのような気持ちでこの世を生きているのでしょうか。「狭い門から入りなさい。」 「天の国は、狭い門を通らなければ入れない。」 もう何回も聞いて知っていますよね。『狭い門』というのは、自分に預けられた運命的な十字架を気持ちよく負うことではないでしょうか。十字架が好きで抱き締める人は、この世の中にはいません。みんな自分のものにしたくありません。しかし、それぞれの人をよく見ますと、必ずその人にある十字架があるのが分かります。私たちは、その十字架を自分のものと考え、どのくらい感謝しながら、どのくらい心をこめながら、負おうとしているのでしょうか。それを振り返ってみれば、今歩いている道が、狭いか、細いか、それとも誰でも歩いて何でもできるような広くてのんびりした道なのかがはっきり分ると思います。

皆様、もう一度申しあげます。狭い門から入るためには、「神様に預けていただいた十字架が、私を立ち上がらせ、人間として完成させる宝物である」ことを認めながら生きるしかありません。それを今日の福音を通して考えてみましょう。やはり、十字架は捨てたいです。しかし、それがなければ、私たちは一歩も進めないことを意識しましょう。

“狭い門から入る”のは、“自分に預けられた運命的な十字架を、気持ちよく、感謝しながら受け入れること”であると意識しましょう。

ありがとうございました。